

災害支援の全フェーズで発揮されるソーシャルワーク

ー災害緊急期ソーシャルワークの可能性ー

○ 別府大学 氏名 今尾 顕太郎 (会員番号 010432)

キーワード：災害ソーシャルワーク、三層構造、連続性と拡張性

1. 研究目的

厚生労働省「災害時の福祉支援体制の整備に向けたガイドライン」(2018)でも謳われているように、日本の災害福祉支援体制は近年、避難所・仮設住宅・復興住宅・在宅避難者等への支援が広がり、要配慮者の健康維持や地域福祉資源のネットワーク構築など、多くの成果を上げてきた。中でも、従来の災害ソーシャルワーク論では、主に「避難生活の支援」「復興期の自立支援」「災害時要支援者への集中的支援」など、災害発生後から長期にわたる連続的支援の重要性が強調されてきた。

一方で、特に災害緊急期(平野, 2023)のソーシャルワーカーの役割は、未だ理論化・体系化が十分とはいえない。前出のガイドラインでも福祉的支援は、「救命救急が完了するなど、チームが活動する上での安全性が確認された時点」以降の想定である。一部の先行研究では、被災地医療機関に所属するMSWが自施設内でトリアージや転院・退院調整等を担う等の言及はあるが、災害医療支援チームや災害対策本部・拠点等、現場外も含めた多層的なソーシャルワーク実践は十分に議論されていない。

それを受け、本研究では、災害急性期におけるソーシャルワークの実践を、

- ① 医療機関内での個別支援(マイクロレベル)
- ② 医療チームの一員として現場で活動する移行的・連携的支援(マイクロ～メゾレベル)
- ③ 災害本部・調整拠点での地域横断的なコーディネーション機能(メゾレベル)

という“三層構造”で仮説的に再構築し、特に②及び③におけるソーシャルワークの可能性について整理・検討することを目的とする。

2. 研究の視点および方法

本研究では、厚生労働省「災害時の福祉支援体制の整備に向けたガイドライン」(2018)、日本学術会議提言(2021)などの文書、立木(2016)、後藤(2021)、平野(2023)らの先行学術研究を整理・分析した。また、筆者自身の実践経験(東日本大震災、熊本地震等におけるDMAT隊員・国立病院医療班等としての災害急性期現場での活動)も踏まえ分析した。分析視点は以下の三層である。

なお、災害医療チームや災害対策本部活動等の経験を有するソーシャルワーカーへの聞き取り調査は、今後の研究の中で実施を予定しており、本要旨には含まれていない。

1. マイクロレベル(第1層)：所属病院や地域拠点病院のソーシャルワーカーが、患者・家族の意思決定支援、トリアージ部門や転院・退院調整等を担う役割・意義・課題。
2. マイクロ～メゾレベル(第2層)：被災地に外部から支援に入る災害医療チーム(DMAT

等)の一員として活動するソーシャルワーカーが、ロジスティックス機能とソーシャルワーク機能をどのように融合させうるのか。

3. メゾレベル(第3層): 災害対策本部や保健医療福祉調整本部等の拠点において、ソーシャルワーカーが果たす「資源リンケージ」「情報ハブ」「行政職員の補完」等の広域・組織横断的機能、その有効性と今後の課題。

3. 倫理的配慮

本研究で用いた記録・情報は、筆者の実践記録および公開文書に限られており、個人情報の特定につながらない形で整理・分析を行っている。今後予定している聞き取り調査については、所属機関である別府大学の倫理審査委員会に申請・承認を得た上で実施する予定である。現時点での研究における利益相反はない。

4. 研究結果

本研究の分析を通じて、災害緊急期におけるソーシャルワーク実践は、ミクロ、ミクロ～メゾ、メゾという三層構造として整理できることが示唆された。また、各階層において、災害緊急期に発生する福祉ニーズに対するアセスメントや調整・リンケージなどの機能が一定の有効性を持つことも示された。

この結果、これまで主に議論されてきた応急期～復興期～災害予防期におけるソーシャルワーク実践の役割に加えて、緊急期～応急期においてもソーシャルワークが重要な役割を果たしうることが明らかとなった。

5. 考察

本研究の成果から、災害急性期におけるソーシャルワーク実践は、(1) 所属医療機関内での個別支援(ミクロ)、(2) 災害医療チームの一員として現場で活動する支援(ミクロ～メゾ)、(3) 災害対策本部や保健医療福祉調整本部等における広域調整・コーディネーション(メゾ)、という三層構造で整理できることが示された。とりわけ、従来は十分に理論化・体系化されてこなかった災害緊急期においても、ソーシャルワーカーが多様な役割を果たす可能性が示唆された。

このような三層構造が現場で有機的に連動することで、災害発生から復興期、さらには災害予防期に至るまで、ソーシャルワーク実践の「時間的な連続性」と「階層的な拡張性」の双方が担保される意義が明確となった。すなわち、ソーシャルワーカーによる支援が、災害支援の全フェーズ・全レベルで切れ目なく展開しうることは、今後の災害支援体制の整備や人材育成、実践指針策定においても重要な基盤となる。

今後は、こうした三層構造の連動性を意識した体制整備やネットワーク構築、ソーシャルワーカー自身の専門性向上、理論的体系化を焦点として研究を進めたい。